

もし円形に彫り込んだ器をイメージしたのなら、そこらにある瓶の蓋でもなんでも良いのでそのイメージの大きさのものを探してきて、それを型紙にすると良い。コンパスを使って直接鉛筆などで書いても良いのだけれど、何か形のあるものを使うと自分のイメージにあった大きさかどうか確かめながら進めることができる。次にその周りに縁になる形を書いてそれが収まるように前後左右を切っていく。前後は年輪と直角方向に切る必要があるのでノコが良い。左右は木の繊維方向なのでナタで割っていくことができる。そうするとイメージした器の塊ができてくる。そこまでできれば、断面方向の形のイメージも木に書いておこう。徐々に底に向かって小さくするのか、凹みのエッジから縁にかけて一旦膨らませてから小さくするのか、寸胴のままにするのかなどだ。そこまで木に描いてくると早く削ってみたくなる。

削るのは先に書いたように器のメインの凹みからだ。先に周りを削ってしまった器の凹みを力を入れて掘り下げる時に器がグラグラしないように固定できなくなってしまう。まだ周りが四角い箱のような状態だとしつかり作業台に固定することができる。端材でつくった固定台は両側に厚めの板を止めたもので、その隙間に器を入れ隙間を木でつくった楔を打ち込んでがっちり固定するものだ。そうやって固定してから描いた形に掘り下げていくのだが、それは手斧ではできない。私が使っているのは長く曲がった丸ノミだ。使いかにはちよつとコツがあつて深く突いてしまうと木に食い込んだままになってしまう。出だしはノミを立てて力を入れて突いても途中からしゃくするように削り切るようにする。もし、食い込んでしまったら一旦抜いて反対側から突いてしゃくするようにして削り取るとリカバリできる。それを下図に沿って目標とする深さまで繰り返す。出来るだけ凸凹や彫り込むカーブが不揃いにならないように丁寧なおくおくとあとが楽になる。

器の凹みができたら今度は外側だ。ここは手斧を使う。丸太を立てて台にス口すると良い。四角い木を丸く整形にしていく時は、闇雲に斧を振り下ろすより、角をねらっていくとやりやすい。それも少し木を斜めにして振り下ろす。角を下から順に削り落としていく感じか。角を削り落とすと新しく二つの角ができるので、それらの角をまた削り落としていく。それを繰り返していくと徐々に形ができてくる。時々、手にとつて撫でみると形の歪みなど把握できるし、愛おしさも増してくる。細かに削りたい時はナイフを使う。斧もナイフも怪我に注意しなければいけないが、私はそれらの先に自分の手足が位置していなければ刃は当たらないという理論でやっている。あと大切なのは刃を切れるようにきちんと研いだ状態にしておくということ。これは今の私のレベルでは語る自信がないので割愛する。

この作業を丁寧にしていくとそれだけで器ができる。もちろんノミ跡とか斧で削った跡がある状態だが、それはそれで味がある。もう少ししつるつとした仕上がりにした場合は磨いていくことになる。

